

旧記にみる家譜の成立前夜 ～目黒盛豊見親の系譜から見えるもの～

下地 利幸（宮古島市総合博物館々長）

はじめに

中山王府が系図座を設置し、首里、那覇を中心とした士族に家譜の編集を命じたのが1689（尚貞21）年のことで、宮古・八重山の役人に家譜の編集が許されたがその40年後の1729（尚敬29）年、それから25年後の1754年『白川氏正統家譜』が成り、3年後の57年に『忠導氏正統家譜』が成った。

家譜の編集にあたっては「在番に於て各役々の中から委員を挙げて家譜編修に着手し、古記録辞令及び信ずべき口碑伝説等により20余年の歳月を閲して諸士の家録を修し、御系図奉行の監修を経て、宝暦5年（皇紀2415※1755）の頃これを完了した。」（慶世村恒任『宮古史伝』）

ここでは家譜成立以前に編さんされた旧記、『御嶽由来記（1705）』、『雍正旧記（1727）』、『宮古島記事仕次（1748）』等の記録から、目黒盛豊見親の系譜（炭焼ダル・西銘の嘉播親の系譜）をたどることで目黒盛豊見親5代の孫仲宗根豊見親へと連なる家譜成立の過程を考えてみることにする。

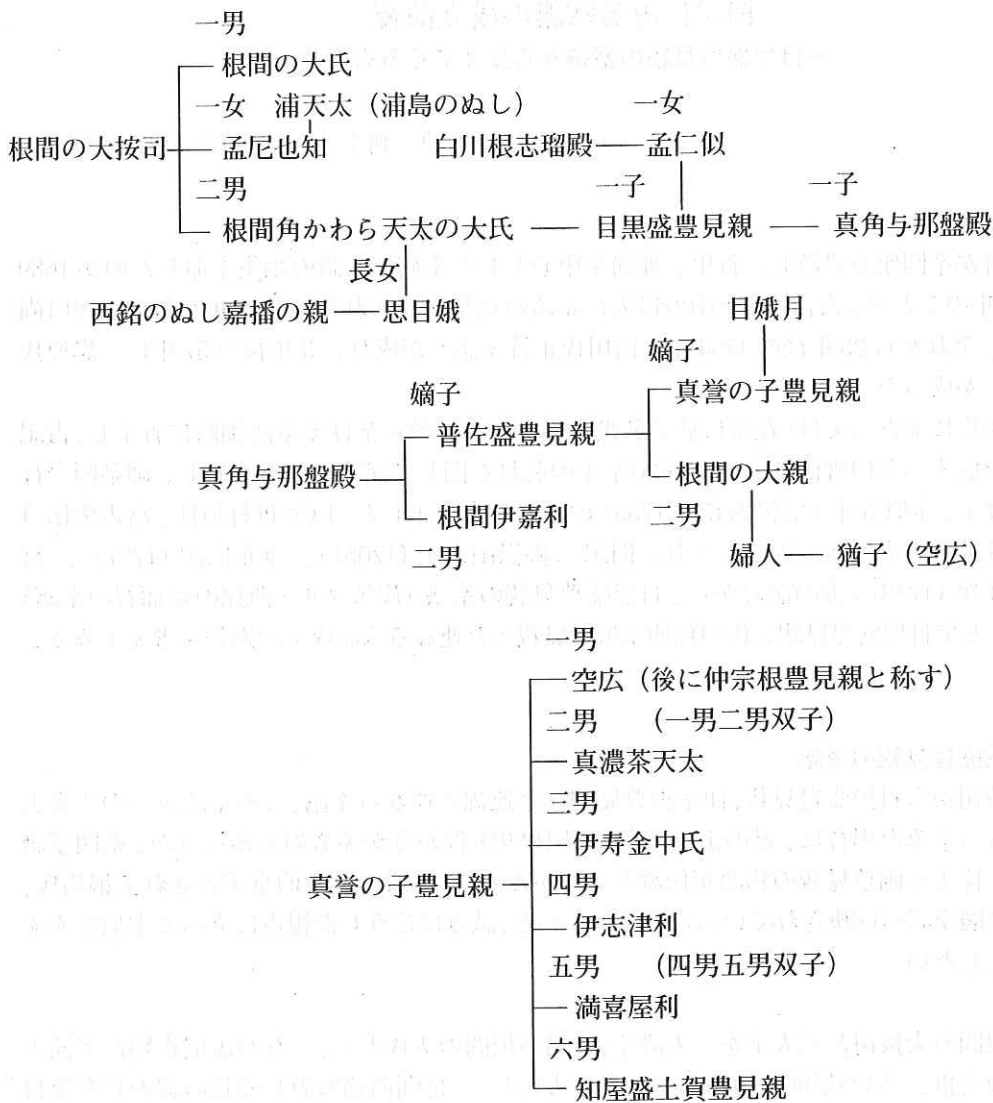
1 目黒盛豊見親の系譜

根間大按司から目黒盛豊見親、仲宗根豊見親へと連綿と連なる系譜、この系譜をそのままよしとせず疑ってみた場合に、どのような豊見親（歴史）像がうかぶものであろうか、系図家譜成立以前に偉大な両豊見親の物語が伝説としてかたちづくられ、歴史的事実とされて根馬氏、忠導氏の系図家譜へ反映されていったのではないか、試みにこうした視点に立って本稿をすすめることとしたい。

むかし根間の大按司と云人子を三人設く、一男ハ根間の大氏と云、一女ハ孟尼也知とて浦天太と云人の妻也、二男ハ根間の角かわら天太の大氏と云、是則西銘のぬし嘉播の親の長女思目娥と云孝女の夫なり、此人一子を設く目黒盛といふ是ハ目の上に北斗の黒痣有故に名とせりとそ、此子三歳の比父母没す故に伯父根間の大氏に養育せらる（『宮古島記事仕次』）

目黒盛豊見親を初代とする根馬氏系図家譜正統（写）には、根馬大按司を「吾始祖」と記し、「大按司息男根馬角嘉和良天太之大氏、同人一子目黒盛、目黒盛嫡子真角与那盤殿、与那盤殿二男家督根馬伊嘉利、伊嘉利嫡男桃多良、其嫡子中智盛、其嫡子川平首里大屋子定基是則為根馬氏系祖也」と記されている（『平良市史』第三巻）、同じく根間大按司から始まるとする忠導氏系図家譜正統（原）には、大按司については「根間大按司」とのみ記し、「元祖仲宗根豊見親玄雅之高祖目黒盛豊見親」は「根間大按司之息男根間角嘉和良天太之大氏之一子也」とし、「目黒盛之嫡子真角与那盤殿、与那盤之嫡子普佐盛豊見親、普佐盛之嫡子真誉之子豊見親、真誉之子嫡子は則元祖仲宗根豊見親玄雅也」と記す。（『同市史』）

根馬氏系図家譜は根馬大按司を「始祖」と記し、忠導氏系図家譜は仲宗根豊見親を「元祖」、



〔記事仕次〕

目黒盛豊見親を「高祖」とする。辞書を引くと、始祖は、「ある物事をはじめた最初の人、元祖、また家系の最初の人」とあり、元祖は、「家系で、その最初に相当する人、先祖、始祖、ある物事を最初にはじめた人、鼻祖、創始者」などとあって、どちらも同じ意ととれるが、始祖には、「ある物事をはじめた最初の人」が最優先されるといふことであれば、これを単に根馬氏系の開祖者としての呼称とするよりも、宮古（平良の根間）に出現した最初の有力な氏族である根間氏の開祖者たる始原的な意味合いをもつ呼称とみるならば、このことがあるいは根馬大按司を「始祖」とし、仲宗根豊見親を「元祖」とするゆえんかも知れない。慶世村恒任は「ネイマ（根間）はネシマの約転である。ネは根で『根元』『根どす所』『総本山』の意を含み、転じて『根立てたる物』（始めたる物の意）の如く事物の始めのことともなった。（中略）ネイマとは『根ざした場所』『始めの村』『始まりの島』という意味である。」（『宮古史伝』）と述べて

いる。「高祖」は、遠い祖先、四代前の先祖、祖父の祖父母とあり、これは仲宗根豊見親を目黒盛豊見親五代の孫「玄孫」とすることからの呼称と思われる。

2 目黒盛豊見親は「神化の人」

先にも記したが目黒盛は、根間の大按司の二男根間の角かわら天太の大氏を父に、炭焼長者で名高い西銘のぬし嘉播の親の長女思目娥を母に出生する。三歳の頃父母が没したので大按司の嫡男（一男）で伯父にあたる根間の大氏に養育されて成人する。記事仕次に見える根間の大氏は下男なども抱え、それなりの勢力を張っていたように思われるが、この後のことはなにも伝えられていない。記事仕次に先行する雍正旧記には「外間御嶽男神称間大按司、根間津のかつらと唱 右由来元祖根間大按司、其子根間津のかつら、其子目黒盛、其子真角与那盤、其子普佐盛五人の墓所」とあり、嫡男（一男）とされる根間の大氏の名は出てこない。先に記した根馬氏、忠導氏の系図家譜にはこのことを意識してのことなのか、ともに記事仕次で根間大按司の嫡男（一男）とされる根間の大氏についての記載はなく、「根間（馬）大按司息男根間（馬）角嘉良天太大氏」と、角嘉良を「息男」とのみ表記している。根間の大氏の記録を無視する事ができず、かといって角嘉良を二男とするにも抵抗感があっての「息男」なのだろうか。慶世村恒任は記事仕次の記載を誤りとみてのことなのか「父は根間大按司の嫡男角嘉波良天太大氏」（『宮古史伝』）と「嫡男」と明記し、根間大氏については単に「伯父」とのみ記している。稲村賢敷は記事仕次のとおり「根間大按司の次男根間角が一ら天太の一子」（『宮古島庶民史』）としている。

記事仕次では、目黒盛の父母である根間の角かわら天太の大氏と思目娥がともに目黒盛三歳の頃没したとすることで、目黒盛の養い親が当然になんらかの形でいなければならないことになり、このことが根間の大氏の役割ということになるのだろうか。雍正旧記、仲宗根豊見親末孫鯖不食候事の中に「（西銘かはにやの）姉女子平良村称間てたの不ちと申人の女房に成り子孫致繁栄候」とあり、同じく生子の額に鍋のひすこを付け候事の中に「其（西銘かはにや）女子ハ平良村てたの不ちと申人の妻になり子孫繁昌仕候」とあって、先の記事仕次からすれば父母は目黒盛三歳の頃没したが、目黒盛一子から子孫が繁昌していったということになるのだろうか。かくて目黒盛が豊見親と崇められ一大勢力を張っていく中で嫡男（一男）根間の大氏は根間大按司の系統から押し出され角嘉波良天太の大氏、目黒盛系統にとって変わられることになったものなのか。

宮古島の戦乱の世を統一した目黒盛豊見親は「もしくは神化の人ならんかいかんとなれハ寿命百弐拾歳にして百姓を恤む事赤子のこたく或ハ攀寮に入て神と共に遊び或いは干する時ハ雨を祈れハ忽に雨降りしとなり」と人々から評された（「記事仕次」）。その父母で三歳の頃没したとされる根間の角かわら天太の大氏、思目娥両人もまた、やはり神の領域の人であったのであろう。目黒盛という一代の英雄「神化の人」を世に送り出せるのは神の働きがあって初めてなせるものであった。「角かわら」、これを下地の川満村の目利真御嶽に祀られる神で、天女の天仁屋大津かさと目利真按司との間に生まれた娘、目利真まか那志が十三歳の頃懐胎し、十三ヶ月を経て男子を出産するが、「其子頭に角式つあり手足ハ鳥足ニ似テ人間の姿にあらず其の名をハ目利真角かつらと申」（『雍正旧記』）とある「角かつら」と同義とみるならば、異形のもの（神の霊力）の働きが感じられる名称のように思われる。この角かわらを父に、鍛冶（鉄）

の伝来を伝える炭焼ダル・西銘の嘉播親の娘を母とする出自は、当然のこととして目黒盛の血筋を正し、島の正統な統治者としての地位を神から授けられたものとするにふさわしいものであったといえよう。

目黒盛豊見親は目の上に北斗の黒痣がある故にその名を得た。これは野崎長井の里の娘、真氏が産屋の業にかなない額に鍋のふす粉(鍋の煤)を付けさせられたことに係わることのように思われる。西銘のぬし嘉播の親の長女思目娥(真氏の娘)を目黒盛が母として出生することの必然性、真氏の福分(竈の神・穀霊の精の導き、日に七升の糧)を引き継ぐべく生まれでたことを象徴的に語るものであり、このこともまた神の働きかけによるものといえよう。

根間大按司が根拠とするのはもとより根間の地であったと思われるが、目黒盛についてはどうだろうか。親譲りの畠いもひげもりは稲葉嶺を打越した地に残されている。平良(外間根間)からはかなり離れた地にあり、西銘の領域に近いところかあるいはその領域内のように思われる。西銘のぬし嘉播の親が自分の土地を角かわら天太の大氏に譲り渡したもののなか、極上の土地とされるいもひげもりは目黒盛が幼少故か糸数大按司に預けおかれた。預けおく先が、三歳の頃から目黒盛を養育した伯父の根間大氏ではなく、何故糸数大按司なのだろうか、このことを根間大氏と角かわら天太の大氏、目黒盛との関わりの中でどのように考えればいいのか。

目黒盛は白川根志瑠殿という長者の一人娘孟仁似を娶り、外間根間に城を構えて勢力基盤を固め、与那覇原軍(いぶさ)に勝利し島の統一を果たした。

根馬氏系の名乗り頭は「定」でこれは目黒盛が「やへ が てき なぎばらい よなはばらばねかへし いうさよ や ためなおし おぼみやこ すま さだめ」(目黒盛豊見親が島鎮めのアヤゴ「宮古史伝」)たことによる。島を鎮め行末を定めた人である目黒盛が、平良の根間を根拠として宮古(平良)で最初に興り、「根ざした場所」「始まりの村」で勢力を張って氏族の「始祖」となったであろう「根間大按司」の後を襲い、正統な後継者として根間氏一統を引き継いでいくことも、また、神の働きかけによるもののごとく必然性があったということであろうか。

3 仲宗根豊見親は目黒盛豊見親五代の孫

雍正旧記の「仲宗根豊見親末孫鯖不食候事」中に「(西銘かはにやの) 姉女子平良村称問てたの不ちと申人の女房に成り子孫致繁栄候、このかはにやハ仲宗根豊見親外戚方の先祖にて候、この由来を以其末孫鯖を氏神と慎喰不申候」とあり、おなじく「嶋中の為メ勲功有之候人由来」に「根間目黒盛豊見親跡嶋主 大立大殿童名まさり 大立大殿跡嶋主根間目黒盛五代の孫 仲宗根豊見親童名空広」の記載が見える。記事仕次には「嘉播の親子共三兄弟不孝の事附孝女兩人父を迎し事」の次に「附録 嘉播の親の長女思免娥ハ根間の大按司の二男角かはら天太の大氏の婦人なり、嫡子一男目黒盛豊見親、其子真角与那盤、其子普佐盛豊見親、其子真誉の子豊見親、其子仲宗根豊見親なり云々」と記されている。また先にも記したように、忠導氏系凶家譜正統には「高祖目黒盛豊見親」とあって、「目黒盛豊見親之嫡子真角与那盤殿、与那盤之嫡子普佐盛豊見親、普佐盛之嫡子真誉之子豊見親、真誉之子之嫡子者則元祖仲宗根豊見親玄雅也云々」と記されている。

先にも記した外間御嶽は、「根間大按司、その子称間津のかわら、その子目黒盛り、その子真角与那盤、その子普佐盛の五人の墓所」で、「子孫あい揃い祭りを行っていたが普佐盛の弟、伊かりが竜宮界より先祖供養の鞍称り祭りを伝授されたときに墓所を囲い御嶽に仕立てその前で鞍称り祭を行うようになった。」場所で、「元祖根間大按司」から続く根間氏一統の先祖をまつる墓所であり、御嶽でもある先祖重代の地であった。けれども何故なのかこの外間御嶽には、雍正旧記にも普佐盛までの五人の墓所とあるように、普佐盛の嫡子真誉之子からは、その嫡子の仲宗根豊見親をも含めて祀られることがなかったようである。このことはなにを意味するものだろうか。平良字西仲の真玉にある豊見親墓は、仲宗根豊見親が父の真誉之子豊見親の霊をとむらうために築造したと伝えられている。(しかし実際には18世紀中葉に築造されたものとされている。)

外間御嶽に祀られなかったのは仲宗根豊見親が新たに忠導氏を興し、その元祖となって根間氏一門から離れたことによるのだろうか、しかしそれでは父の真誉之子豊見親はどうなのか、忠導氏の元祖は仲宗根豊見親であり、父の真誉之子豊見親は依然として根間氏一門のはずで、しかも普佐盛の嫡男ということであれば、仲宗根豊見親が父の霊をとむらうために築造したとする先の豊見親墓の伝承も、これからすると今ひとつ説得力にかけるといえる。

仲宗根豊見親は先にあげた「雍正旧記」や「記事仕次」の記事にみるように、目黒盛五代の孫と明確に示されている、しかもかなり強調されて繰り返し記述されているようにさえ思われる。このことを踏まえてのことであろうか忠導氏系図家譜では「高祖目黒盛豊見親」と記録されている。先にも記したように「高祖」とは、四代前の先祖、祖父の祖父母を意味し、仲宗根豊見親から数えて四代前の先祖が目黒盛豊見親であることを意識しての尊称であるように思われる。仲宗根豊見親を「目黒盛五代の孫」と伝え、系図家譜に「高祖目黒盛豊見親」と記録する。そしてこれを明らかに宣言するかのごとく示すのが、仲宗根豊見親を元祖とする忠導氏が名乗り頭とする「玄(げん)」の一字だと思われる。「玄雅」、仲宗根豊見親玄雅は目黒盛豊見親五代の孫、名乗り頭は「玄」、五代の孫は玄孫(やしやご)、また「玄」一字で「やしやご」「孫の孫にあたるもの」(小学館「日本国語大辞典」)とある。何故これほどまで「五代の孫」にこだわり強調するのだろうか、偉大な目黒盛豊見親の五代の孫であることを誇りとして、民衆に誇示し後世まで伝えたかったからか、しかし仲宗根豊見親は当時であってはずで目黒盛豊見親を凌ぐ偉大な存在として民衆に君臨していたであろうから、このことをこだわりの根拠とするにはいかに思われる。

目黒盛豊見親を元祖とする根馬氏の名乗り頭は「定」で、これは先にも記したように目黒盛豊見親(定政)が、戦世を鎮め島の行く末を定めたことに由来するものとされている。また与那覇勢頭豊見親を元祖とする白川氏の名乗り頭は「恵」で、これも始祖の恵源公(与那覇勢頭豊見親)が白川浜(恵浜)において貢船を造り、始めて中山へ海路を開いたゆかりの地であることによると系図家譜に記されている。名乗り頭はその家系の元祖の事績や由来を象徴的に示す一字をもって定めるようであるが、忠導氏が名乗り頭を「玄」とした由来については特に伝えていないようである。(伝えられない何らかの事情があったものなのか。名乗り頭を使用するようになったのは家譜成立以後のこととされており、当時の目黒盛豊見親や仲宗根豊見親がそれぞれ自ら「定政」と名乗り「玄雅」と名乗っていたわけではない。後世家譜成立の際に一門の子孫によって追称された。)

仲宗根豊見親が(その子孫の忠導氏が)目黒盛豊見親五代の孫にこだわり、二重三重の手法をとって強調し主張したということは、逆にそう主張し強調しなければならない立場にあったからではなかったか。それを仲宗根豊見親が本来の血筋としての「五代の孫」ではなく「猶子」として根間氏の系統に入った「五代の孫」の立場だったからと解釈するとどうなるものだろうか。

根間の大親いまた子をまうけすして卒去す、故に婦人これを嘆き真誉の子豊見親の子を貰て猶子とせんことを願う、豊見親の曰、空広真濃茶天太二人の中より目利きして猶子にせよと許す 叔母空広を猶子として是を養う(「記事仕次」)

これは普佐盛豊見親の二男根間の大親(嫡男は真誉の子豊見親)の婦人が空広を猶子とするくだりで、これからすると嫡男の真誉の子豊見親の子である空広(真誉の子の嫡男)を猶子とすることだから、空広は由緒正しく目黒盛五代の孫であり、婦人の猶子となってもそれが変わるものではない。ちなみに猶子とは兄弟、親戚、また、他人の子を自分の子としたもの。相続を目的としないで仮に結ぶ親子関係の子の称。と先の辞典にある。

真誉の子豊見親(猫(まゆ)ぬ子豊見親)は「此子誕生の時大いなる猫来りて赤子の側に踞て片時も去らず、外間へう為立の時も彼猫先立ちてまいりしゆへに字をまよの子と名つけたりとそ」と記事仕次は述べている。実に奇妙というか不思議な猫であり、名前である。しかしいくら不思議の猫でもこのような行動を現実にとることはないと思われるから、このことについてどう考えればよいものだろうか。猫の習性からでてきたものとみた場合にどうなのか、猫は子を産んだ場所にそのまま居着いて子育てするのではなく、外敵から子を守るためなのか、子が親離れするまでに何回か場所を移す(巢をさらえる)習性があるといわれている。ひとところに落ち着かないで転々と居場所をかえることを、宮古では「猫ぬ子をさらへるよう」と云うようである。記事仕次に「真誉の子豊見親子共六人を設く婦人ハ目娥月という人なり、一男空広(後に仲宗根の豊見親と称す)二男真濃茶天太といふ此兩人學子也、三男ハ伊寿金中氏、四男ハ伊志津利といふ五男ハ満喜屋利とて四男五男も學子也、六男は知屋盛土賀豊見親といふ」とある空広六人の兄弟、記事仕次中でここだけにこれだけの兄弟の名を書き記すこと自体が特異のことに思われるし、これがどういう意味をもつものなのか、男子だけというのも気になる所だが、これも猫が一度に出産する子の数から連想されたものと見ることもできないことはないように思われる。(そうなると子供六人まとめて「六つ子」ということになるわけだが、しかしさすがにそれはできないことなので、かわって「學子」ということにしたものか)

真誉の子豊見親は根間の大親の婦人の願いをいれて、空広を根間の大親の猶子にする。記事仕次には幼少の頃猶子にしたらしく「叔母賢良にして能く子を教ふ空広性孝順にして母の教えに志たかい七歳の比より名誉をあらハせり云々」とあって、空広その七歳の頃、庄園で奴僕を下知した折りに「當世の主大里(立)大殿」と出会い「其形相不凡言語さはやかにして大人の風あり」と評され、大殿「是より空広を寵愛して大殿の許にて成人しける、空広十七歳の時より加和良保爺と云人と共に摂権を聞かせめたり」と記述されている。せっかく願い出て猶子とした婦人はその後どうなったものなのか記事仕次はなにも伝えていない。

真誉の子豊見親は空広(仲宗根豊見親)の父なのだろうか、仲宗根豊見親その人が実は真誉

の子(猫ぬ子)と云われていたのではなかったのか、そんな思いがする。その「猫ぬ子」である空広を「猫ぬ子の親」が、猫が巣をさらへて子を育てるようにさらへ、次々と移しかえて育てる。根間大親の婦人の猶子として養育され、大里大殿の許に預けられて(見いだされて)成人する、このことで空広の道が大きく開いていく。「真誉の子」と表記するのにもかかっても仲宗根豊見親にふさわしい表記のように思われる。こう想定して、それではその「真誉の子」である仲宗根豊見親を、猫の子育てのように育てた父とは誰であったのか、そのことについてはなんとも言いがたいけれども、しかし奇妙な言いまわしになるがそれはあるいは仲宗根豊見親自身だったのかも知れない、と思ったりもしている。偉大な島の主である仲宗根豊見親の血筋を語るためにこのような物語が作りだされていった。炭焼ダル・西銘の嘉播親の系譜から根間氏の本宗を引く継ぐ目黒盛豊見親五代の孫たるべく「真誉の子」が出現された。

大殿及老衰候付男子ぬちでもい空広兩人へ申付當嶋下知させ候所、大殿死後二ぬちでもい致上国帰帆の砌久米嶋へ漂着病死仕候、首里之蒙御詔大殿跡職空広頂戴仕為御目見致し上国候間、金銀御簪頂戴仕罷下申候(「雍正旧記」)

空広は大殿の跡を継いだぬちでもいが、中山朝貢の帰途久米島に漂着してそこで病死したので、中山に赴き尚真王に謁して命を奉じて宮古島の主長となった。(忠導氏家譜には「尚円王世代 成化年間朝見中山の命を奉じ宮古島之の主長と為りたる古伝有也」と記している。ここでは白川氏家譜に「尚真王世代 成化年間、恵照(ぬちでもい)父に代わり貢を捧げ帰島のとき逆風にあつて久米島に漂着病死云々」とあることから、上記の雍正旧記と合わせて「尚真王」とした。)

中山王に謁して宮古島の主長に任じられたときに空広にもっとも必要とされていたのは島の新しい主長たるにふさわしい血筋、由緒正しい出自であることを中山に示すことではなかったか、そのときにあたって空広は自らの出自が島の主長として、また、正統な統治者としてふさわしいものであることをしっかりと整えておく必要があったはずである。(空広は中山王尚真に謁するにあたり尚真の父尚円(金丸)が第一尚氏王統を倒して新しい王朝を開くが、そのまま尚氏王統の継嗣として尚円を名乗り、中国皇帝の冊封を受けて国王に封じられたことについて、また、後に農民出身の父に「尚稷」の諱を追称したことについても知識として充分備えていたものと思う。仲宗根豊見親にとって「真誉の子豊見親」とは、まさに尚円にとっての「尚稷」であったのではなかったのか。先の豊見親墓の伝承もこう見ることで視界がひらけるように思われる。)この要求をみだす条件を備えていたのが始祖根間の大按司から由緒正しく伝えられた目黒盛豊見親の系譜ではなかったのか、仲宗根豊見親はその系譜に普佐盛豊見親の嫡子としての「真誉の子」を出現させた。そして自身「真誉の子の子」として根間大親の猶子となって根間氏本宗を引き継いだ。記事仕次では猶子になったのは七歳以前こととあるが、こうした考えにたてば、猶子となったのはあるいはもっと後年のことで島の正統な統治者として、その勢力基盤を固めていく以降のことなのかもしれない。

仮定に次ぐ仮定の話になるが、普佐盛豊見親の嫡子が真誉の子豊見親でないとするれば、本来の嫡子は根間の大親だったのではなかったか。根間大按司から続く根間氏本宗を継ぐ名前には根間の大氏、根間の大親などの呼称がなによりふさわしく思われる。大親(うぼうや)、今日

でも「うふうや」という呼称は父母の兄弟で一番上の伯父、父母の長兄を敬って呼ぶ言葉として使われている。このことで空広が根間の大親の猶子になることの意味もより深まってみえてくる。根間氏本宗の猶子となることで目黒盛が打ち立てた(神から与えられた)島の統治者としての地位を受け継ぎ与えられたことを当然のこととし、名実ともに島の正統な支配者としての地位を確立する。こうみたときに仲宗根豊見親が目黒盛豊見親五代の孫として、目黒盛を常に意識してきた行為もまたみえてくるように思われる。

4 普佐盛豊見親の愁い(鬱気)と伊嘉利の先祖供養

普佐盛豊見親齢七十の頃、婦人偕老同穴のかたらいをそむき世を去り給ひしかハ、普佐盛豊見親深くこれを歎き寝食ともにやすからず、真嘗の子豊見親天性孝順にして定省の勤めおこたらさるにかかる御有様を見てさらにやすからず、昼夜心をつくして保養すといへとも愁い(鬱気)を解くに術なし(「記事仕次」)

普佐盛豊見親は婦人が亡くなったことで深くこれを歎き、真嘗の子が昼夜の保養をつくすにかかわらず愁い(鬱気)がいよいよ深まるばかりであった。真嘗の子豊見親がどうしたものかと案じ煩っていたところ、ある人から、しかるべく婦人を嫁がせ身のまわりの世話をさせれば鬱気もおのずから解けるだろうと云われ、狩俣村の婦人を迎えて嫁がせたところ、月日重ねる中で亡くした婦人の面影も忘れ、二人の娘も設けた。普佐盛豊見親は無病息災にして父祖の寿命にならい百二十歳にして卒した。

偕老同穴の婦人を亡くせばそういうことも起こりうるであろうが、しかしいまひとつそんなものだろうかという思いが拭いきれない。普佐盛豊見親の深い歎き、愁い、解けない鬱気とはもっと深いところから発するもののような気がする。根間大按司を始祖とする根間氏一族に生じた最大の困難に直面しての愁い、そこからくる解けない鬱気、根間氏の由緒ある血筋に氏族の外から自らの嫡男として根間氏継嗣を迎え入れる。普佐盛の二男(本来の嫡男かも知れない)である根間の大親は空広を猶子にとらさられる。もっとも記事仕次の「根間の大親いまた子をまうけすして卒去す」とあることを踏まえれば、根間の大親を本来の普佐盛の嫡男と考えた場合に、普佐盛にも一子を亡くして後に残る子がなかったことになり、受け入れる条件はあったと考えられないことではない。いずれにしても、このような状況に直面して苦悩する普佐盛豊見親の姿がみてとれないだろうか。二人の娘の名前の由来となった不思議のこともあるが、ここではふれない。ただ名とする「ざんめか」「うつめか」の「ざん・うつ」ともにそうした思いからみてとるからなのか、どこか暗い、普佐盛の鬱気にひびくものが感じられる。

そして、このような状況の中で伊嘉利が竜宮界から伝授された、先祖供養の鞍称り祭も執り行われたと考えたらどうであろうか。

根間の伊嘉利ハ至て孝心深き人にて、父の喪に三年墓所に廬して涕泣しけれハ、竜宮界より仙女をつかハし祭のうたを教ん為に満ねかれしとなり、三年三ヶ月に帰宅すと云々(「記事仕次」)

此祭拾三年廻ニ壹度九月之内の先祖所にて祭候得は、天地の願御加護先祖之靈神ハ上天仕

り、嶋豊ニ子孫繁栄可有之候間、忘間敷由御教御座候（「雍正旧記」）

鞍称り祭は外間の墓所に神人数二十四人で伊嘉利を真中に立ち囲み、伊嘉利は台に立って西方向かって名蔵草紙を唱え、二十四人の者は伊嘉利が詞にあわせて節ごとに拍子を揃えて鞍を打って十三日間祭りを執り行ったとある。先祖の霊を慰め、供養して、子孫繁栄を願う祭り、十三年周りに一度行われる大がかりな先祖祀りがこのとき普佐盛の弟伊嘉利によって始められた。

根間氏一統を揺るがす重大な事件が引き起こされた。このことによって一族の先祖供養祭祀である鞍称り祭りもまたおこるべくしておこった。「普佐盛の弟根間の伊嘉利ハ神化の人なるへし」と記事仕次は記している。目黒盛豊見親を初代とする根馬氏の系統はこの伊嘉利を三代目として引き継がれていく。根間氏の家督を二男の伊嘉利が継いでいくことを先祖に告げ知らず何らかの儀式も、この祭りの場でとり行われたのかも知れない。こうして嫡子普佐盛は根馬氏の系図では子とする真誉の子からも切り離されたように普佐盛の一名だけが残され、真誉の子、空広もまた当然のこととして外間御嶽にまつられることはなかった。

5 「空広」について

仲宗根豊見親玄雅童名空広、「空広」を慶世村恒任は「そらびろ」と読み、「スウラピスウ」とも表記している。稲村賢敷は「そらびい」といい、また「そらびる」とも云っている。どちらも「空」は「スウラ、そら」としている。けれども宮古の方言で「空」を「そら」とする言葉はないように思うが、どうなんだろうか。宮古の言葉では「空」は、ティン（天）で「そら」とはいわない。空の虹は「ティンヌパウ」（天の蛇）、スウラというときの「スウラ」は「空」ではなく先端のことで、「木ぬスウラ」（木の先端、梢）とか、「ぶうぎぬ スウラをうち」（きびの梢頭部を切れ、打ち落とせ）などという。空広の読みが「スウラピスウ」であるならば漢字の表記（当て字）では、「空広」ではなく「末広」とする表記がほんらいの形であるように思われる。

末（すえ、草木の上方の末端、こずえや枝先など、物の先端、末端、子孫）などと前記辞典にある。

仲宗根豊見親を元祖とする忠導氏一門が、仲宗根豊見親から末広がりになり広がり栄えていく、本来こういう意味合いからの「スウラピスウ」ではなかったかと思われる。それが記事仕次に仲宗根豊見親を真誉世の子の嫡男（一男）としたことで、「末」と表記するのが不都合に思われて「空」の字を当てたものなのか。ただし「空広」の表記は雍正旧記にもみえることだからこのことはいまは何とも言いがたい。御嶽由来記の平良大首里大屋子次第の中に「平良大首里大屋子 字そらひる」、「東宮金 平良大首里大屋子 字ひるかり」の字（童名）がみえる、「ひるかり」が「広がり」と読めるのであれば、合わせれば「そらひるかり」で「スウラヒルカリ スウラピスウガズ（末広がり）」となる。仲宗根豊見親（空広）のあとからもこのような童名がみてとれる。（宮古郷土史研究会の顧問を務める佐渡山正吉先生から、後日、「そら・スウラ」についてご教授をいただいた。『全国方言辞典』（昭和26年発行）に奈良県の方言で「そら」には長男、総領、跡取りという意味があり、先の方、始まりの方、先に生まれた者という意味での「そら」で、宮古でも人名に「そら・スウラ」があるのはそのような意味合いで使わ

れているということであった。まさに嫡男であることでの「そら・スウラ」であり、末広がり
を意味する「スウラピスウ」ではなかったかとする先の説はもはや取り下げべきものであろ
うが、今はそのままにしておく。）

おわりに

外間御嶽は普佐盛までの5人の墓所とある雍正旧記の記録をたよりにここまで稿を進めてき
た。真誉の子豊見親、仲宗根豊見親父子が外間御嶽に祀られていないことを疑問に思いながら
旧記を読み進めていく中で、このようなことがうかんできた。ことばが遊んでいる感じがしない
でもない。

忠導氏正統家譜は白川氏正統家譜に遅れること3年で成った。しかし忠導氏おやけ屋の大王
が書いた本を原本として当時の在番筆者明有文長良が著したとされる宮古島記事仕次は、白川
氏家譜の成立に先立つこと6年、1748年に成立している。この書は、目黒盛豊見親と仲宗
根豊見親の古事を中心にまとめられたいわば忠導氏一門の書ともいえるものであり、家譜の編
さんをも強く意識してまとめられであろうことが考えられる。その意味で忠導氏家譜はこの書
の成立によって大方は定まっていたものと思われるから、実質的には忠導氏の家譜は白川氏
の家譜に先行して成ったとも考えられる。また白川氏でも家譜の編さんにあたって、この書を無
視して独自の家譜づくり行うことはまずできなかったであろうし、白川氏につづく各士族たち
の家譜づくりもまたそれは同様であったはずである。そういうことなども考えあわせながら本
稿をまとめてみた。

参考文献

『平良市史 第三巻』（資料編1 前近代）

慶世村恒任『宮古史伝』（1927年）

稲村賢敷『宮古島庶民史』（1957年）

（しもじ・としゆき）